

コミュニケーション、経験、言葉

— 文学テキストとして読む大学入試センター試験

土屋 結城、檜村 真由、北 和丈、
伊澤 高志、瀧口 美佳、佐藤 繭香

1. 序論

日本における「文学と英語教育」をめぐる議論については、2000年代以降、日本英文学会やその関連団体でも頻繁に目にするようになっていく。簡潔に言えば、伝統的な英文学のテキストが排除される昨今の英語教育界への批判的介入として、文学テキストを英語授業で活用する方法やその意義を論ずる、一種の教材論が主である。しかしながら、文学研究や批評理論の分野に目を向けると、「作者の死」を宣告したロラン・バルトの名を挙げるまでもなく、1960年代以降は「文学」を特定の作者・作品やジャンルといった名詞的なものに帰するのが難しくなっている。また、ミシェル・フーコー以降の「言説」という概念により、文学研究が歴史学や社会学などと接近し、その領域を広げてきたことも見逃せない。

これらの動きを踏まえ、「文学と英語教育」の新たな接点として、文学研究が築き上げてきた「読む」という方法論を活かし、名詞ではなくむしろ動詞、あるいは行為としての文学という考えをもとに英語教育の問題に介入する試みを行ったのが本研究の出発点である。¹

この研究のさらなる発展として、本論文では緊急性、代表性、社会的影響力のいずれの観点からも重要度が高い大学入試センター試験（以下、センター試験）を取り上げる。1990年（平成2年）に始まり、2020年にその役目を終えようとしているセンター試験は、平成という時代をほぼすべて目の当たりにしてきたことになるが、この時代は、学習指導要領の歴史的

大転換で幕を開けた時代であるともいえる。したがって、センター試験の英語を学習指導要領とともに読み解いてみれば、平成という時代の日本の英語教育の姿を一つの歴史として記述、つまり「歴史化」できるのではないか、そしてその「読み」——すなわち、文学研究の蓄積を活かした読み——が最も生きるのは、一貫してある程度のまとまりで英語を提示している、第5問と第6問の長文問題であろう。

2. 学習指導要領の変遷と大学入試センター試験

センター試験をテキストとして読むための、いわばサブテキストとして重要なのが、外国語（英語を含む）に関する学習指導要領である。表1のとおり、高等学校の学習指導要領は戦後8回の改訂を受け、昭和35年度以降はおよそ10年に一度、新指導要領の告示と導入が行われている。センター試験が導入されたのが平成2年なので、受験者が高校で教育を受けた時期を考慮すると、センター試験の問題は昭和53年8月告示のものから4つの学習指導要領をもとに作られたことになる（以下、「学習指導要領」は高等学校のものを指す）。

表2はその4つの学習指導要領における、外国語の「目標」の変遷を示している。平成元年度告示版の学習指導要領は、「外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てる」ということを、初めて正規の目標として掲げている。これは、1970年代から外国語教育及び第二言語教育において大きな潮流となっていたコミュニケーション・アプローチが、1980年代に日本でも広まり始めたことを背景とした学習指導要領で、日本の英語教育がコミュニケーション志向へシフトした画期を示すものである。しかし同時に、この版では目標があくまでも「国際理解を深める」にある点に注意したい。確かに平成元年度告示版は一つの画期を示すものだが、この段階では「コミュニケーションを図ろうとする態度」は「国際理解を深める」ための手段に位置づけられているのである。

平成10年度告示版になると、この「国際理解」という文言が消え、目的

に「実践的コミュニケーション能力を養う」ことが掲げられる。コミュニケーション能力育成が手段ではなく、目的と化したのである。その「実践的コミュニケーション能力」とは、この版では「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現する」能力であると定義づけられている。現行の平成20年度告示版では概ね目的は変わらなかったものの、「実践的コミュニケーション能力」の定義が「情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力」に変えられた。比較すると、「相手の意向」が「考え」に変わり、「的確に」「適切に」が付け加えられるという変更がなされたことになる。

外国語の指導要領において「コミュニケーション能力」育成の重要度が年を経るごとに増している点に関しては、さまざまな議論がある。そのような議論を背景にしつつ、本論文では、指導要領の理念の具現化の一つであるセンター試験の問題を読み解くことによって、指導要領上では矛盾なくつながっている「外国語教育」と「コミュニケーション能力」育成の目標が、実は微妙で複雑でねじれた関係性にあることを論じる。

3. 長文問題と「コミュニケーション」

学習指導要領をめぐる変遷を背景として、センター試験英語問題第5問と第6問の形式と題材を通史的にまとめたのが表3である。昭和53年度告示版の学習指導要領が反映されている平成2年度から平成8年度まで、第5、6問の主な形式は説明文、エッセイ、物語だったが、その後は学習指導要領の改訂に呼応した変化をしている。転換点となったのは、平成9年度第5問に登場した会話である。会話はその後、平成19年度まで連続して出題される。また、手紙形式も平成12年度になって第6問に取り入れられる。さらに進んで平成10年度告示版をもとに作問した時期になると、各科目の指導へ推奨されるものとして新たに加えられた「視聴覚教材やコンピュータ、情報通信ネットワークなど」に呼応する形で、平成25年度第5問に映画のレビューサイトを書きこまれた2つのレビューを扱う問題、平成27年度第5

間に電子メールのやり取りを扱う問題が登場する。

中でもコミュニケーションという主題に注目すると、平成10年代頃までは、平成3年度第6問、平成4年度第6問、平成15年度第6問のように、題材そのものが異文化間コミュニケーションである問題や、平成2年度第6問、平成10年度第6問のように動物や自然を相手とするコミュニケーションが取り上げられる問題もある。

このように、何らかの形で「コミュニケーション」が取り上げられている長文問題は複数あるが、中でも「言葉」と「コミュニケーション能力」の微妙な関係が露わになる問題を取り上げ、上述した「外国語教育」と「コミュニケーション」の関係を考察することとする。以下の引用は平成5年度第6問、語り手が今や家長となったため、父に食卓の定位置から移動して欲しいと頼むという問題の抜粋である。

Mom and Dad arrived for lunch, and went into the dining room. Dad moved towards his usual seat in front of the window that opened to the backyard. Before he could get around the side of the table, I took a deep breath and said, “Dad, this is going to be your place, next to Mom, on the side.” He stopped and looked at me. Then he sat where I had indicated. . . .

. . . I don’t know how Dad felt. I do know that, though removed from his usual place, he continued to share his best self with us, telling stories of his childhood and youth to the delight of his grandchildren.

It wasn’t easy, but I sense that there is also something good in the change which has occurred. I am beginning to learn that “honoring one’s father” is more than the question of which place to occupy at the dining table. It also means listening, wherever we sit and whatever our own positions, to the stories Dad longs to tell. (平成5年度 第6問、強調筆者)

このように家長の象徴的な場所である食卓の椅子をめぐる「私」の微妙な心持が描かれる長文問題だが、この文章では二種類のコミュニケーション

が描かれている。一つは父と「私」の、もう一つは父と、孫たちを含む家族とのコミュニケーションである。

その中でも、父と孫たちとのコミュニケーションは一種の理想形として提示されている。家長の象徴的な場から追いやられても、父は“he continued to share his best self with us.”と「私」たちとのコミュニケーションに対して協力的な態度でいる。コミュニケーションにおける“share”の概念はSNSの隆盛とともに注目されるようになったが、1960年代という早い時点でその二者を結びつけていたのが Raymond Williams である。Williams は *The Long Revolution* において、“Communication is the process of making unique experience into common experience, and it is, the claim to live.” (58) と述べ、個人の体験、経験を“share”することにより、その経験を“common experience”“common meanings”にすることの重要性——“the claim to live”——を説いている。さらに、続けて以下のように述べてもいる。

the process of communication is in fact the process of community: the sharing of common meanings, and thence common activities and purposes; the offering, reception and comparison of new meanings, leading to the tensions and achievements of growth and change. (59)

Williamsはこの引用にあるとおり、社会の変革、成長をもたらすためのコミュニケーションにおける“sharing”の重要性を説いており、その点は本論の範囲ではない。しかし、試験とはいえ、教育目的で作成された文章の分析において、社会への発信を行い続けたWilliamsの議論を枠組みとして参照することは妥当であろう。

Williamsの*Keywords*にならいTony Bennettらが編集した*New Keywords*においては、以下のように記述されている。

As early as the C17, communication also had another, more participatory sense. Here it referred to a common participation or a shared quality or

affinity, as in the Christian **communion**. This is strongly present in the contemporary American English usage, where a speaker may preface their remarks by saying that they wish to “share something” with their hearer or audience. A further sense focuses on the idea of communication as, potentially, a process of “making common to many” a particular set of ideas or experiences. (Morley 48, 太字原著者、強調筆者)

ここでも Williams の議論を受けて、「コミュニケーション」という語に、“share” することを通してある種の考えや経験を “common” にするという意味合いを見出している。

先ほどの長文問題において父は具体的に何を “share” しているかといえ、 “stories of his childhood and youth to the delight of his grandchildren”、すなわち自身の “unique experience” を、孫たちとのコミュニケーションを通して、世代を超えた、一家にとっての “common” なものにしようとしているのである。そして息子も、“It [honoring one’s father] also means listening, . . . to the stories Dad longs to tell.” とあるように、父の経験を孫たちを含めた家族全員の “common experience” にすることの意義を理解する——もっとも、この文章においては、父の物語を聞く行為が家父長制の維持という物語に回収されてしまうが。

もう一つの、父と「私」のコミュニケーションはどのように描かれているだろうか。「私」は食卓の定位置を譲ってもらうために、意を決して自分の父に “Dad, this is going to be your place, next to Mom, on the side.” と今までとは違う場所を指して述べる。すると父は “He stopped and looked at me.” と「私」に視線を投げかけ、“Then he sat where I had indicated.” と座る。父は「私」を見ただけで、「私」の発言の意図、さらにはその発言に込められている「私」の複雑な感情まで理解したと思えるほど従順に従う。この場面では、父の感情は語られない上に (“I don’t know how Dad felt.”)、厳密には「私」が父に決定的な発言をした瞬間の感情も語られない——その瞬間については、“I took a deep breath.” という描写があるのみである。そして父

が座った後の「私」の反応はといえば、“I sense” とやはり言葉では語られない。父も「私」も椅子を譲ってもらうことに付随する気まずさ、互いへの思いやりといった個人的な体験 (“unique experience”) をし、恐らくその複雑な感情を “share” したであろうと思われるが、それは言語化されないのである。つまり、この文章においては、父と孫たちとのやり取りに見られるように、コミュニケーションの理想的な一形態が提示されている一方で、その理想的なコミュニケーションには言葉は必要ないのかもしれない、という可能性も書きこまれてしまっているのである。

コミュニケーションにおける言葉についての問題をさらに浮き彫りにするのが平成19年度第6問、ヨーロッパ旅行に行く孫とその祖父のやり取りを描いた長文問題である。この物語の中で祖父は、自身がバルセロナの動物園を訪れ、アルビノのゴリラを見た体験を話す。その描写が以下である。

“In fact,” Grandpa said, “I did not think he [a very special albino gorilla] was real when I first saw him. When I moved closer, though, he turned slowly toward me and calmly looked directly into my eyes. For the first time ever, I felt intelligence and awareness in the eyes of another species. It made an impression on me that I will never forget. . . . As we gazed into each other’s eyes, the 140-kilogram gorilla suddenly slapped his hand flat against the glass wall, making a loud, forceful sound that made all the people in the room cry out in surprise.” (平成19年度 第6問、強調筆者)

この文章でも先の問題同様、二種類のコミュニケーションが描かれている。一つは祖父と孫の、もう一つは祖父とアルビノのゴリラとのコミュニケーションである。

祖父と孫のコミュニケーションは、やはり先の問題同様、祖父の “unique experience” が孫と共有されるという一種の理想形として描かれている。しかし、一方の祖父とゴリラとのコミュニケーションに目を向けると、再び言葉の問題が浮上する。祖父はアルビノのゴリラと目が合い、祖父の方で

は“intelligence”と“awareness”を感じ、ゴリラの方でも何かを感じ取った様子である。しかし、当然ゴリラは言葉を用いないので、ゴリラがなぜ突然壁を叩き始めたり、大きな音を立て始めたりしたのかは祖父にも読者にも伝えられない。両者の間でどのような経験が共有されたかは——種を越えて共有することが可能だったとして——、本人にも読者にもわからない。むしろここでのコミュニケーションは、経験の共有というよりは、感情の共振ともいうべき物理的な反応であったようにも読み取れ、その点が平成5年度の長文との相違点であるともいえるが、いずれにせよ人間とゴリラの間で言葉を介さずに通じ合った瞬間が描かれていることは指摘できよう。

上に挙げた2つの文では、どちらも“unique experience”を“common experience”にするという形のコミュニケーションが描かれる一方で、そのようなコミュニケーションは言葉を必要としないという可能性も書きこまれてしまっていた。この目と目によるコミュニケーション、言葉に表れない意思の読み取りは、読者（試験の受験者）にも求められる。平成7年度第6問、コウモリが住みついた納屋のある家を売ろうとする家族の話では、コウモリの話専門家に聞いた後、語り手が“I was silent.”と無言になってしまうが、問題の問3では、“Why did the author fall silent when he talked with the bat specialist?”とまさにsilentになった理由が問われる。

問3: Why did the author fall silent when he talked with the bat specialist?

1. He felt reassured about the situation.
2. He found out that it would be impossible to remove the bats.
3. He learned that he would be able to share his luck with the expert.
4. He liked the advice given by the expert.

正解は、語り手が無言になった直前のやり取りから判断して選択肢2である。

平成10年度第6問では、自分だけの釣り場を見つけた老人フレッドが、

釣った魚を放してその場を静かな秘密の場所にしようと思う箇所で “Then, with a quiet smile, the old man made ready to start for home.” となり、これも問5で “Why did Fred smile as he set off for home?” と “quiet smile” の理由が問われる。

問5: Why did Fred smile as he set off for home?

1. He was looking forward to having a delicious trout for dinner.
2. His daughter's family would praise him for catching such a fine fish.
3. The people who had teased him would have to apologize to him.
4. The pool he liked so much was going to remain quiet and undisturbed.

答えの根拠は段落2つ分にまたがり、その内容を全体的に把握する必要があるが、正解は選択肢4である。これらの問題では、“silent”、“quiet smile” という表現から見て取れるように、登場人物が発話していない場面が取り上げられ、いわば無言の意味を考えさせられる。

このような言葉（の不在）とコミュニケーションの関係が指導要領でどのように定義づけられてきたかについて一つの鍵となるのが平成10年度版の指導要領である。この指導要領では、英語の目標の一つに「相手の意向などを理解」することが挙げられている。語り手が黙した場面、登場人物が静かな微笑みを浮かべた場面では、まさにその沈黙の意味を読み取ること、すなわちそれらの人物の「意向」の理解が求められているともいえ、この学習指導要領と同様の目的を共有している。

しかし、指導要領とセンター試験の問題の時系列からも明らかであるが、本論で取り上げているコミュニケーションに関しての学習指導要領の改訂とセンター試験の長文問題の内容の因果関係は明確ではない。表3にあるとおり、センター試験が平成10年度告示の指導要領を反映させるのは平成18年度からであり、上で引用した問題のいくつかは平成18年度以前のものである。すなわち、ここで指摘できるのは、学習指導要領とセンター試験の両者が日本における英語教育政策の潮流、あるいは先にも挙げた

Williamsの用語でいうところの“structure of feeling”を共有していたのではないかということである。²

一方で、言葉を使わずに人と人が——ときには人と動物が——コミュニケーションできるという事実は、外国語教育においては都合が悪い。この点に関連してJohn Durham Petersは以下のように指摘している。

Too often, “communication” misleads us from the task of building worlds together. It invites us into a world of unions without politics, understandings without language, and souls without bodies, only to make politics, language, and bodies reappear as obstacles rather than blessings. (30)

Petersは、コミュニケーションという概念が言葉を要さない相互理解を志向し、ときに言葉を障害物として捉えてしまう可能性に導くと指摘している。父と息子、人間とゴリラが目と目で意思疎通でき、互いの“unique experience”を共有できるなら、Petersが指摘しているように言葉はむしろ邪魔になってしまう。しかし、そうすると、外国語教育はその存在意義を失ってしまうのである。

4. ヴィジュアル読解とコミュニケーション

平成19年度までの長文問題に注目すると、以上のような言葉とコミュニケーションに関する矛盾が露わになってくるが、センター試験の問題の傾向は平成20年度にいったん変わる。物語が消え、絵や図に合う説明文の問題や、2つの話を聞いて情報を統合するような問題が採り入れられるようになる。このような問題は、現行の指導要領の「情報や考えなどを的確に理解」という目的と合致し、言葉で表現されている内容に焦点を当てることになる。本論文で取り上げてきた“the process of making unique experience into common experience”としてのコミュニケーション行為という観点からすると、特に2つの話を聞いて情報を統合するタイプの問題——

イラストがからむことが多いため、ヴィジュアル読解とも呼ばれる——が転換点となる。この形式の問題は平成22年度から平成27年度まで形を少し変えながら出題されてきた。平成22年度の第5問では、あるできごと——Route 300 という4車線の道路上の交差点で危うく小型バンとスポーツカーが衝突しそうになった事故——を目撃したWitness AとWitness Bの証言を読み、情報を統合して問いに答える形となっている。しかしこのWitness AとWitness Bの証言は食い違い、問4と問5でその食い違いが取り上げられる。以下は問4である。

問4: Witness A probably thinks that there was almost an accident because of

1. the new traffic signals at the intersection
2. the sports car ignoring the traffic signal
3. the truck moving to avoid the sports car
4. the van going too fast for the area

正解は、Witness Aの証言にある“The signal was red, but instead of slowing down, the car [a brand-new sports car] sped ahead rapidly. The driver was going to go through the intersection when the light was red!”という文から判断して選択肢2となる。

一方、問5は以下のとおりである。

問5: Witness B probably thinks that there was almost an accident because of

1. the sports car speeding through the intersection
2. the traffic signals that were put up recently
3. the truck turning away from the sports car
4. the van driver driving dangerously

正解は、Witness Bの証言にある“as the van was approaching the signal, the light turned from green to yellow. But the driver went faster when he should have

slowed down – he drove into the intersection where he almost hit a sports car.” という文から判断して選択肢4である。

この問題では、引用したようにWitness AとWitness Bでは見ていた状況の解釈が異なるが、この2人は互いにコミュニケーションせず、自身の経験を共有しない。先述した物語とは登場人物同士のコミュニケーションがなくなるという点で異なる。ただし、読者（受験者）とは共有しているとはいえるかもしれないし、その共有は2人の証言を詳細に読むこと、換言すれば、言葉を介して行われるため、言葉を要しないコミュニケーション行為が書かれてしまっているという矛盾は、いったんは解消されているといえよう。

5. 再び、物語文

このように絵、図を用いた問題や、2人の証言から情報を統合するタイプの問題が続いたが、平成28年度入試から再び物語が取り上げられている。新たな物語は前述の矛盾にどのように対処しているのか、平成29年度入試で具体的に検討したい。平成29年度第5問は、ネコと体が入れ替わり、ネコの立場から自分を見る機会を得たユウジという男の子の物語であった。この物語では、以前のように言葉にならない部分を問う問題がある。ネコになっていたのが夢の中で起きたできごとだったと知ったユウジは、起きてからスマートフォンを手取るが “Without thinking, as was my usual habit in the morning, I started to walk to my desk where my smartphone had completed charging and . . . I stopped.” という部分の、この三点リーダ部分の心情を問う問題、いわば先ほどの例にもあった沈黙部分を問う問題が出題されている。

問4: At the end of the story, Yuji did not pick up his smartphone because he

1. decided it was time to improve his attitude
2. realized that it was not yet fully charged
3. wanted to stick to his old priorities
4. was afraid of being scolded by his mother

正解は消去法で導き、選択肢1である。

この問いがどのような傾向を持つのがさらに明らかになるのが問3と問5である。スマートフォンをいじっていて母親の呼びかけに応じない自分の姿をネコ目から見て、ユウジはその姿を好きになれないと思う。その部分についての問いが問3である。

問3: The cat thought, “I don’t like this guy,” because Yuji

1. could not recall the taste of food he had eaten at breakfast
2. tried to hide his efforts to study for the final exams
3. was making fun of his mother’s concern for his future.
4. was not showing respect for people or things around him

正解は選択肢4である。この問いでは、朝食を黙々と食べ母親の問いかけに答えなかったという、ネコ目から見たユウジの表面上の態度から「尊敬の念」という内面にまで踏み込む問題となっている。

さらに問5ではこの物語全体のテーマが問われる。

問5: What is the theme of this story?

1. Cats have much better senses than humans.
2. Observing yourself can lead to self-change.
3. People using smartphones look strange.
4. Unbelievable things can happen in dreams.

正解は選択肢2の “Observing yourself can lead to self-change.” だが、選択肢3の “People using smartphones look strange.” や選択肢4の “Unbelievable things can happen in dreams.” も内容と大幅に異なるわけではなく、それらが正答とならない理由は、予備校の解説によると「この物語の主題とはいえない」というものである。換言すれば、この問題は「主題にふさわしい文章はどれか」を考えるとという一種の価値判断を伴う問題になっていると結論づけ

られる。踏み込んでいえば、学校で教えられる、ある種の価値観——『『成長するのはいいことだ』とか、『自立するのはいいことだ』とか、『人の気持ちを大切にすることはいいことだ』といったこと』(石原、『中学入試』174)——を理解している読者ならば、本文を精緻に読まずとも正解を選べる可能性が高いのである。

平成29年度の問題文の内容や問いをこのように分析し指摘できることは、確かに以前と同様の「意向」を問う問題があるが、以前とは傾向が違ふということである。本論文で取り上げた問いの答え、“to improve his attitude”、“showing respect for people or things around him”、“observing yourself can lead to self-change”はいずれも、ネコの姿になって人間の自分を見るという特異な体験をしなければ得られないというような洞察ではなく、一般的な、ともするとクリシェに近い洞察である。この問いにおいては、ネコになるという特異な体験、“unique experience”を読者との“common experience”として共有するのではなく、“common experience”を“unique experience”に押しつけ、その“uniqueness”を消し去っている。その意味において以前の問題とは反対の方向を向いているコミュニケーションなのである。³

6. 結論

このようにRaymond Williamsの議論を一種の補助線としてセンター試験の長文問題を論じることにより、「外国語教育」と「コミュニケーション能力」の複雑でねじれた関係が露わになったといえよう。コミュニケーションという行為の意味を、“unique experience”を“share”する行為であると捉えたと、そのような行為は言葉を介さずともできてしまうという矛盾が浮かび上がってきた。一方、言葉の読み取りに焦点を当てると、ヴィジュアル読解に見られるように、“share”という側面が弱まってしまった。平成28年度から復活した物語では——特に平成29年度の問題においては——英語の読解という面においても“share”という意味においても、それまでとは

異なる傾向の問題が出題され、問題によっては、英文を精緻に読まずとも正解にたどり着けるのではないかと思われるものもあった。2020年に役目を終えるセンター試験だが、このような手法で読み解くことにより、その「歴史化」を始める必要があるのではないだろうか。

注

本論文は、日本国際教養学会第6回全国大会における発表「大学入試センター試験を『歴史化』する—文学テキストとして読む英語長文問題」(発表者:土屋、伊澤、檜村、北、瀧口)のメンバーに佐藤を加え、大幅に加筆、修正を施したものである。

- 1 土屋結城、伊澤高志「文学という行為と英語教育」参照。グローバル市場で流通しているOxford University Pressの英語教科書を批判的に読むJohn Grayの実践例も本研究と問題意識、手法を共有している例として挙げられよう。
- 2 もっとも、この潮流に関してはより広範囲にわたる言説分析を必要とするところであり、本論ではあくまでもセンター入試の長文問題に表れる潮流であると指摘するにとどめておきたい。
- 3 この流れを考察する上で、石原千秋が国語の各種入試問題について指摘した国語の道德化という問題も念頭に置く必要があろう。

引用文献

- Gray, John. "The Branding of English and the Culture of the New Capitalism: Representations of the World of Work in English Language Textbooks." *Applied Linguistics*. Vol. 31, No.5. 2010. pp. 714-33.
- . "Neoliberalism, Celebrity and 'Aspirational Content' in English Language Teaching Textbooks for the Global Market." *Neoliberalism and Applied Linguistics*, edited by David Block et al., Routledge, 2012, pp. 86-113.
- Morley, David. "Communication." *New Keywords: A Revised Vocabulary of Culture and Society*, edited by Tony Bennett, et al., Blackwell, 2005, pp. 47-50.
- Peters, John Durham. *Speaking into the Air: A History of the Idea of Communication*. U of Chicago P, 2000.

Williams, Raymond. *The Long Revolution*. 1961. Parthian. 2013.

『2015年版センター赤本シリーズ1 センター試験過去問研究 英語』教学社, 2014.
 国立教育政策研究所 学習指導要領データベース作成委員会『学習指導要領データ
 ベース』2014年12月26日 www.nier.go.jp/guideline/

石原千秋『国語教科書の思想』筑摩書房, 2005.

---『秘伝 中学入試国語読解法』新潮社, 1999.

土屋結城, 伊澤高志「文学という行為と英語教育」『実践英文学』第67号, 2015, pp.1-16.

東進ドットコム「大学入試センター試験 解答速報2017」

<http://www.toshin.com/center/>

大学入試センター「過去3年間分の試験問題」

<http://www.dnc.ac.jp/data/kakomondai.html>

(表1, 2, 3は日本国際教養学会発表時配布資料より一部改め転載)

表1 高等学校の学習指導要領(外国語)
改訂時期

S 22 (1947)年3月 [試案]	文部省発行
S 26 (1951)年7月 [試案]	文部省発行
S 30 (1955)年12月	文部省発行
S 35 (1960)年10月	文部省告示
S 45 (1970)年10月	文部省告示
S 53 (1978)年8月	文部省告示
H 元 (1989)年3月	文部省告示
H 11 (1999)年3月	文部省告示
H 21 (2009)年3月	文部科学省告示

※二重線以下がセンター試験作問に係わる

表2 外国語の「目標」の変遷

S53年度 告示版	外国語を理解し、外国語で表現する能力を養うとともに言語に対する関心を深め、外国の人々の生活やものの見方などについて理解を得させる。
H元年度 告示版	外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める。
H10年度 告示版	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。
H20年度 告示版	外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う。

表3 学習指導要領（外国語）とセンター試験（第5問、第6問）の変遷

センター試験 表記年度	対応する 学習指導 要領	問題の 形式・題材の 変化	第5問	第6問
H 2 年 (1990 年)	S53年度 告示版		説明文、豆腐の歴史について	物語（一人称）、芸達者なサルを預かることになった男性の物語
H 3 年 (1991 年)			説明文、高齢化問題	物語（一人称）、日本人高校生とアメリカ人女性の文通
H 4 年 (1992 年)			説明文、余暇の使い方	物語（一人称）、アメリカからヨーロッパに1人で旅した息子をうらやましく思う父
H 5 年 (1993 年)			説明文、テレビの危険性について	物語（一人称）、いつも家長の位置に座っていた父。今や語り手がその場所に座ることに
H 6 年 (1994 年)			説明文、イラクの遺跡で発見されたネアンデルタール人のコミュニティから障がいについての考察	評伝、1938年のダグラス・コリガンによる無着陸大西洋横断の顛末
H 7 年 (1995 年)			説明文、情報とコントロール	物語（一人称）、コウモリが住み着いた納屋を持つ親子が家を貸すまでの顛末
H 8 年 (1996 年)		第4問に 図が配される	説明文、北極や南極の氷から過去の大気の状態を調査する方法について	物語（一人称）、東京の骨董店で手に入れたフランスの絵のルーツを探る
H 9 年 (1997 年)	H元年度 告示版	第5問に 会話導入	会話、英語圏と日本のダイビング時の指サインの指し示すものの違い	物語（三人称）、ニューヨークの電話ボックスで見つけた木製の猫をめぐる事件
H 10 年 (1998 年)			会話、カナダに留学中の日本人大学生が現地の歯医者に行き治療をする	物語（三人称）、釣りをするふりをして1人の時間を満喫する男性
H 11 年 (1999 年)			会話、日本とALTの国のじゃんけんの違い	物語（三人称）、初めてのデートで母から匂うチーズの配達を命じられたミミの話
H 12 年 (2000 年)			会話、コンピュータゲームの攻略法	物語（三人称、手紙）、祖母の遺品のキルトがオークションにかけられるのを残念に思うサリー
H 13 年 (2001 年)			会話、留学している日本人の山歩き	物語（三人称）、海に潜る訓練を自分に課す少年ジェリー
H 14 年 (2002 年)			会話、イギリスの高校で学ぶ日本人と現地友人の手話についてのやり取り	物語（一人称）、ポーランド出身の筆者がピアノを学ぶようになったきっかけとその後の成長について
H 15 年 (2003 年)			会話、キャンプ場で3人（ティー、パット、アンディ）がテントの設営などを行っている	物語（一人称）、親の意向で幼少時にブラジルから日本へ移住したエレナが体験した摩擦と救い
H 16 年 (2004 年)			会話、クラスメートのユキとケリーが、オンライン学級新聞について話している	物語（三人称）、2人の水泳選手ケイトとアンジェラが軋轢を経て成功と友情を手にする
H 17 年 (2005 年)			会話、小学生たちがテレビ局で天気予報の撮影を見学している	物語（一人称＋手紙）、1人の少年のサマーキャンプでの成長物語

センター 試験 表記年度	対応する 学習指導 要領	問題の 形式・題材の 変化	第5問	第6問
H18年 (2006年)	H10年度 告示版		会話、駐車場に止めた車の描写について色や駐車場所のやり取り	物語（一人称）、実家の隣に住む不愉快な老人に、語り手と同じ大学の学生が助けられた
H19年 (2007年)			会話、A：韓国から福岡に遊びに来る韓国人友人との待ち合わせ、B：新しいゲームの説明	物語（三人称）、欧州旅行に行く19歳の孫娘にアドバイスを求められた祖父が、バルセロナの動物園にいたアルビノのゴリラについて話す
H20年 (2008年)		第5問に 絵、図導入、 第6問が 説明文になる	絵、図に合う説明文、A：猫の防御反応 B：月、点線、四角、矢印、丸などの英語表現を使用した図の説明 C：女性と兄がアーチェリーの練習をしている4枚の連続した絵	説明文（一人称）、就職活動を始めた大学3年の姪アンから聞いた話としてIT革命が仕事のスタイルに及ぼした影響を述べる
H21年 (2009年)			絵、図に合う説明文、A：鼓笛隊隊長のユニフォーム B：橋の説明 C：引越しの荷物運びの様子を描いた4枚の連続した絵	説明文（一人称）、大学3年の筆者が英英辞典、英和辞典の良さを理解し、2つの辞書の使い分けることを勧める
H22年 (2010年)		リスニング 問題導入	2つの証言、ある事故についての2人の証言	説明文、「子供」という概念の形成について
H23年 (2011年)			2つの証言、父と娘が家族旅行について語る	説明文、げっ歯類の種の保存に成功している理由について
H24年 (2012年)			2つの証言、カナダの大学に留学した日本人学生の帰国後の体験のスピーチ	説明文、procrastination（引き延ばし）について
H25年 (2013年)			映画のレビュー2本、日本で作成された映画に関する日本人鑑賞者と英語母語話者の鑑賞者によるレビュー	説明文、ダンスについて、フランス・イギリスの社交界、アフリカ、ニューギニア、トリニダード・トバゴのダンスを紹介
H26年 (2014年)			日記と手紙、スペイン人画家の日記と彼の日本生まれの孫の手紙	説明文、音楽を聴く機器の性能向上について
H27年 (2015年)	H20年度 告示版		メール2本、娘が学校になじんでいないのではないかと心配するアメリカ人父が、中学校の担任にメールし返事もらった	説明文、素人が科学の研究を手伝っている事例紹介
H28年 (2016年)		第5問に 物語復活	物語（一人称）、料理コンテストに出る叔父について	説明文、オペラの現状と課題について
H29年 (2017年)			物語（一人称）、猫になって、人間である自分を客観視する夢を見たユウジ	説明文、友情を長続きさせる秘訣について